

2 授業研究と協議会〈10月研究授業月間〉

第1学年A組 国語総合（現代文） 学習指導案

日 時 平成30年10月23日（火）1校時

授業者 工藤 正隆

場 所 県立秋田中央高等学校 1年A組教室

1 単元名 評論「言葉の力」を読んで、筆者へ反論してみよう

2 単元の目標

(1) 文章の構成を確かめ、筆者の意図を的確にとらえ、論理的な反論を考え出そうとする。

【関心・意欲・態度】

(2) 文章の構成を確かめ、筆者の意図を的確にとらえ、論理的な反論を考え出す。

【読む能力】〈「C読むこと」の(1)のエ〉

(3) 文や文章の組み立て、語句の意味や表現の仕方などを理解し、語彙を豊かにする。

【知識・理解】〈[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]の(1)のイの(イ)〉

3 取り上げる言語活動と教材

言語活動：論理的な反論作成に向けて、グループで話し合い、検討する。

教 材：「言葉の力」(『新探求国語総合』桐原書店)

4 本単元で育成しようとする「ことばの力」

本文中の言葉を根拠にして、作品を評価しながら読む力

5 評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
しっかりと自己主張をしつつも他を受け入れ、円滑に積極的に周囲と交流し、反論を導き出そうとしている。	本文を分析して筆者の主張を理解し、論理的に反論を考え主張している。	本文中の語句を正確に理解し、使いこなせる語彙の数を増やしている。

6 生徒と単元

(1) 《生徒の実態》男子17名 女子18名 計35名

活発にグループでの話し合い活動ができ、発想の広がりや深まりが期待できるクラスである。自分たちで役割分担をして、グループの意見のまとめ方にも習熟している。やや受け身的に活動する生徒も見られるものの、グループや学級での学習をリードする姿勢の生徒が育ってきている。

他に共感する、良いところを探すことに生徒は慣れている。しかし、批判的に物事を見ることには課題がある。この授業を通じて、ただ本文を的確に読み取るだけでなく、話し合いによって読みを深め合い、様々な角度から考え、自分の意見を主張する姿勢を養いたい。

(2) 《本単元（教材）について》

本単元で使用する「言葉の力」の後半部分は、中学校教科書、光村図書発行の『国語2』に掲載されている。その部分は随想的な文章であり、筆者の主張の論理性を感じ取りにくい。一方、本単元で初めて学ぶ前半部分では論理的に文章が展開しており、「大げさな言葉は我々をあまり感動させず…」「つつましく発せられたささやかな言葉が、しばしば人を深く揺り動かす…」などの対比構造も見られる。こうした文章の構成や組み立てを的確に捉えることで主体的な読みにつながり、疑問点や課題の発見が可能であると考えられる。ゆえに、批判的な読み方を養うには適切な教材だと判断した。中学時に共感的に読み取ったと思われる文章を、今回は批判的に吟味することによって、異なった視点から読み進めることで読みの深化にもつながると考えている。

(3) 《(1), (2) を受けた, 本単元の指導について》

本単元では, 全文を深く読み込むことによって, 生徒が筆者の論理に納得してしまうことのないよう留意しつつ授業を展開したい。筆者の論理や表現が巧みであるがゆえに, 全文を通読すると, 批判することが難しくなることが予想されるからである。

また, 批判的に読むことにとどまるだけではなく, 筆者の主張に反論する小論文の書き方指導にもつなげていきたい。筆者の主張に反論する小論文を作成し, 筆者の主張と自分の主張を対比させ, 本文の読みを深めることをこの単元のゴールに設定したい。

批判的に読むことに関しては, 個別学習とグループ学習を組み合わせながら進めていきたい。本校はスーパーサイエンスハイスクール (SSH) 指定校として, 理数系の科目のみならず, 全科目において「問題解決能力」の育成に主眼を置いた授業のモデル作りに取り組んでいる。国語科では「問題の発見→情報の収集・共有→考察」を意識した授業を実践している。本単元でもこのパターンに則り, 「個による問題の発見→グループによる問題の共有・選別→グループによる反論考察」と, 授業を組み立てていく。さらに「個による小論文作成での意見の発信」も付け加え, より主体的・対話的で深い学びを生徒に実感させたい。

7 全体計画 (総時間数6時間)

次	本時の目標	生徒の主な学習活動	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
1 (1時間)	・本文前半部分を読み, 中心となる話題や重要な説明を抜き出すことができる。	○重要箇所を抜き出す。 ・自分が興味を持った内容や, 重要だと思った箇所を, 理由や根拠をはっきりさせて抜き出す。	・自分が抜き出した箇所に対しての理由や根拠を説明できるようにワークシートを準備しておく。	・筆者の主張を理解している。【読む能力】 (ワークシート分析)
2 (2時間)	・筆者の主張を論理的に分析できる。	○筆者の主張を吟味する。 ・筆者の主張が客観的か, 具体的か, 矛盾がないか確認する。	・分析するためのワークシートを準備しておく。	・筆者の主張を論理的に分析している。【読む能力】 (ワークシート分析)
3 (3時間)	・筆者の主張に対する反論を考えることができる。	○筆者の主張に反論を考える。 ・前時の分析結果について, グループ内で意見を共有する。 ・筆者の主張を覆すことができそうな分析結果を選別し, 反論を考える。 ・反論を発表する。	・話し合いが円滑に進むようボードを準備しておく。 ・反論は客観的か, 具体的か, 矛盾がないかに注意するよう助言する。	・積極的に交流している。【関心・意欲・態度】 ・論理的な反論ができている。【読む能力】 (ボード記述分析) (発表の確認)
4 (4~5時間)	・筆者の意見について反論する小論文を書くことができる。	○反論型の小論文を作成する。 ・前時の学習を踏まえ, 反論型の小論文を作成する。	・執筆が円滑に進むよう, 小論文の書き方のパターンを確認するように指示する。	・説得力のあるように論理的に小論文を書いている。【関心・意欲・態度】 (提出作品の点検)

5 (6時限)	<ul style="list-style-type: none"> 本文後半部分から、筆者の巧みな表現を味わうことができる。 	<p>○巧みな表現を学ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> 文中から巧みな表現を理由や根拠をはっきりさせて抜き出す。 	<ul style="list-style-type: none"> どこが、なぜ、巧みだと感じるのか、単なる感想にならぬよう、論理的に説明することを意識するように助言する。 	<ul style="list-style-type: none"> 積極的に活動している。 【関心・意欲・態度】 理由や根拠を適切に示している。 【読む能力】 (行動の観察) (ノート点検)
------------	--	--	--	--

8 本時の計画 (本時 3 / 6 時間)

(1) 本時の目標

筆者の主張についての反論を考えることができる。

【読む能力】

(2) 学習過程

過程	生徒の学習活動	学習形態	教師の支援	評価規準 (評価の方法)
導入	1 前時の学習を振り返る。	全体	・前時で使用したワークシートを準備し、生徒自身の分析結果を確認する。	
展開	2 本時の目標と学習の流れを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">筆者の主張について反論を考えることができる。</div>	全体		
	3 各グループで分析結果の共有と考察をし、反論を考える。	グループ	・グループ活動が円滑に進むようボードにフローチャートを記したものを準備しておく。	
	4 学習課題を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">筆者の主張を批判的に捉え、論理的な反論を考える。</div>	グループ	・各グループが作成した反論については、黒板に掲示し、全体で吟味し合えるよう、掲示資料として準備する。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">・論理的な反論ができています。 【読む能力】 (ボード記述分析) (発表の確認)</div>
	5 各グループで話し合ったことを伝え合い、全体で吟味し合う。	全体	・各グループの発表の相違点に着目して聞くよう、助言する。	
まとめ	6 本時の学習を振り返る。	個	・自分の学びを整理するための振り返りの時間を確保する。	

授業研修会〈国語科〉協議会

授業者 工藤正隆（1年A組・国語総合・現代文）

出席者 国語科（森元教育専門監、牛丸、大原、秋山、畠山）

〈授業者から〉

（工藤）

本時の目標は、「筆者の主張について反論を考えることができる」ことである。教材は大岡信の「ことばの力」を用いた。予めプリントで、グループで活動する「本時の流れ」を示したが、正直、難しかった。特に、「反論」の「根拠」を示すのが難しかった。ほとんどのグループで、「反論」イコール「根拠」となっていた。「根拠」は本番ではなくしたい（*11月16日（金）に行われる全国連研究大会秋田大会に行く研究授業を想定している）。

更に、「反論」を「疑問」の形で書いていたグループも散見された。予め「疑問」と「反論」の違いを説明すればよかったと思う。

生徒はよく動いてくれた。ペースもよかったと思う。

〈参観者から〉

（大原）

「生徒の理解はどのくらいなのか」を疑問に思った。論理的に反論することが目標だが、抽象性が高い文章である。班内でどこまで理解を共有できているのか。

（工藤）

内容については3時間行った。「言葉の意味」と「主題」くらいである。深くやると方向が定まってしまうので、何も無いところから反論させたかった。

（森元）

良かった点は、各班の発表の最後に、他の班から「感想」を言わせた点。それが深まりだと思う。授業の中で生徒の思考がどう深まったのか。「なるほど、そうだね」「納得できました」といった場面を作っていくべき。そういう意味では、今回、生徒の思考が深まったといえる。「文章に批判をする」→「生徒の発表についても批判をしていく」という場面が見られればよいが、それには演出が必要。四番手に「批判する人間」も決めておけばよい。「反論に対する反論」も出てきたらおもしろい。

改善点は、「論理的な反論」とはどんなものか、パターンを示したらよい、ということ。小論文を最後に書くなら、最初からフォームを示すとよい。思考訓練になり、いろんな場面で応用・活用できる。

また、指示が全体的に後出しになっていた。生徒が説明を聞いていないので、前を向かせて聞かせるなどして、指示を通してからやらせるとよい。

（畠山）

良かった点は、生徒が活発であることと、マナボードが効果的に使われていること。

改善点は、一人に当てるのではなく、班で確認させてもよかったこと。班としても反論や疑問があればよい。

このようなグループ学習は時間との闘いである。どこをメインに見せるかがポイント。マナボードに書く作業は前時までで、「反論し合う場面からスタート」でもよかったと思う。

（大原）

本文から「大げさな言葉」や「ささやかな言葉」などをただ抜き出されるだけでなく、「これはこういうことを言いたいのでは？」という班なりの解釈をつけさせると深まるのではないかと。

（森元）

「大げさな言葉」「ささやかな言葉」がなんで人を感動させるのか、までふり返る必要がある。反論はどう集約させるのか。「人それぞれ」と言ってしまうとそれまでで、それは禁手である。

(秋山)

改善点は、「なぜなら」を先にボードに書いておくこと。書いている班がほぼなかった。教科書を全員に開かせ、確認しながら進めさせること。開いていない生徒が複数名いた。

良かった点は、「本時の流れ」をプリントで示して見通しがあったこと。

役割のない生徒にも感想を言わせるなど、全員を動かしていたこと。

「振り返りシート」＝「小論文の構成」となる、よいプリントであったこと。

(牛丸)

良かった点は、「次時、600字の小論文作成」につなげたこと。三年間を見通した「生徒の素地を育てていく」指導が授業者の頭の中にきちんとある。

改善点は、どの班からも「質問」が出ず、形式的になっていたこと。

(工藤)

反論するとしたら、やはり「大げさな言葉よりもささやかな言葉が人を感動させる」の部分。その伏線として、最初に「感動した言葉」を書かせてみた。しかし、これがなかなか出てこなかった。

(森元)

どこに反論させるかが難しい。

(工藤)

本番に向けて頑張ります。